

資料紹介

室井義雄著 ビアフラ戦争——叢林に消えた共和国 東京 山川出版社 2003年 205p.



1999年に民政移管したナイジェリアでは、長く軍政下におかれた人々が各地で権利要求の声を上げた。さまざまなグループが名乗りを上げ、それぞれの主張を掲げて運動を展開するなかで「主権国家ビアフラ実現のための運動」なるものが出現し、33年目を期して新たな建国を宣言しようとしたのは2000年のことであった。また2003年の大統領選挙にはビアフラ戦争を指導したオジュクが立候補するなど、いまなお社会にはビアフラ共和国の影が見え隠れしている。

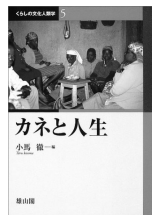
高校生であった著者が憤り、その後ナイジェリア研究の道を歩む「最大のきっかけ」となったビアフラ戦争について、これを記憶にとどめる人が多いにもかかわらず、語られてきたことはあまりに少ない。あるいはフォーサイスのように、あるいは故伊藤正孝氏のように、戦争の或る側面を描くものこそあったが、それらから内戦の本質は見えてこない。その状況は近年、たとえばオジュクの『われ巻き込まれしゆえに』など関係者の著作が登場しても何ら変わっていない。

著者はナイジェリアというモザイク社会の有り様、そして植民地期の遺制を語ることからはじめて、戦争の政治的・社会的背景とその推移、さらにその担い手や国際関係までを総体として描き出そうとする。限られた資料を読み込むことで、その実態にせまろうとする姿勢は、戦況の緻密な記述にもあらわれている。図版の適切な配置もあって、読者はドキュメンタリーとしての戦史を体験するだろう。

近年、旧ビアフラ軍兵士を正規の退役軍人として処遇し、また軍政下での権利侵害を検証する人権パネルで内戦期に関する申し立てを取り上げるといった措置により、国民和解に向けた動きが進んでいる。ビアフラ戦争の記憶を風化させないこと、それは決して著者だけの想いではないはずだ。

(望月克哉)

小馬徹編 カネと人生（くらしの文化人類学5） 東京 雄山閣 2002年 285p.



本書は文化人類学的調査にたずさわってきた第一線の書き手による論集だが、通常の論文集とはひと味違った魅力を湛える。編者はこう語る。「論文や報告書では軽視されがちな出来事の実験と逸話を重視し、またそれに纏わる感情の動きや交々の思いをあえて隠さず、時には日本の事象とも引き比べて筆を進めるように依頼した」(p. 6)。筆者たちがみごとにこの趣旨に寄り添って、フィールドにおける自分自身を論考の中で描き出していることが、本書をとりわけ印象深いものになっている。

テーマは「カネ」である。誰に、いつ、どれほどの「カネ（もしくはその働きをするモノ）」を渡すのか、また、渡さないのか。渡す／渡さないことによって壊れる／生まれるものは何か——学術調査に携わる者のおそらく多くが直面してきたであろうこの「カネ」にまつわる問題を、本書は文化人類学的な仕方から正面から取り扱う。「代わりにヤギをやる」からと言われ、ついに腕時計を渡した筆者が体験することになる顛末（第Ⅰ部第2章、中村香子「お金はミルク、お金は水——牧畜民サンプルのレトリック」）、「互酬を無償と見なす日本人」、「無心できない日本人」を描き出し、人生のゲームのルールを「与え合い奪い合う、仮借ない互酬による熱い闘争」と見なす仕方と対置する第Ⅱ部第2章（小馬徹「人間とカネ——コイン一枚からの出会い」）など、「カネ」のことで悩んだ経験を持つフィールドワーカーの琴線に触れる叙述が続く。

この他、経済破綻により通貨がまさにゴミと化す様を通じて「戦争」としての生が描かれる第2部第4章（澤田昌人「パニックの四〇年——ザイール—コンゴのもう一つの「戦争」」など全11章から成る。いずれも珠玉の作品である。

(津田みわ)

松園万亀雄編 性の文脈（くらしの文化人類学4） 東京 雄山閣
2003年 253p.



本書は、多くの地域研究者にとって関心はあってもなかなか取り上げるのが難しい「性」の問題に取り組んでいる。各執筆者が、各々の研究対象地域でのフィールド調査をもとに論旨を展開しており、各章は独立している。

対象となった国々は、ケニア、ボツワナ、スーダン、トルコ、インドネシア、そして日本である。3部構成で、第Ⅰ部と第Ⅱ部でアフリカのフィールド調査が取り上げられている。以下、アフリカを対象とした五つの論文を紹介する。

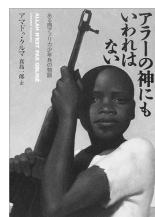
まず第Ⅰ部第1章（河合香吏「チャムスの性のありか」）では、ケニア・チャムスの性と出産、父子関係について事例とともに考察されている。第2章（菅原和孝「即物の性欲」）では、ボツワナのグイ・ブッシュマンの文化における性欲・性のもつ意味を「ことば」への詳細な分析を通して明らかにしようと試みている。そして第3章（椎野若葉「ルオの寡婦と男たち」）では、ケニア・ルオの寡婦の生存戦略ともいえる男性との「テール関係」を紹介している。

第Ⅱ部の3編のうち2編がアフリカを対象としており、ケニア・グシイとスーダンのムスリム社会を取り上げている。前者は、グシイ男性の性文化について、彼らの会話や聞き取りを通して浮き彫りにしている（松園万亀雄「夜はそんなに長くない」）。後者は、男性支配の象徴とされる女子割礼が広く行われているスーダン・ムスリム社会を対象とし、夫婦間の性生活は、女性側にも主体性があり、「協同で築き上げられてゆく努力と思いやりの作業」（p.168）であると指摘している（縄田浩志「香が助ける性の営み」）。

あとがきで編者も語っているように、フィールド調査の分析と、社会学や歴史社会学による分析を「どのようにつなげて総合化をはかるか」（p.250）ということは、今後の課題として残されている。本書は、筆者たちの「性」に対する挑戦の記録の段階であるが、それだけでも充分わくわくしながら読みすすめていくことができる。

（児玉由佳）

アマドゥ・クルマ著 真島一郎訳・解題 アラーの神にもいわれはない——ある西アフリカ少年兵の物語
京都 人文書院 2003年 405p.



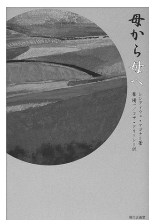
評者がコートディヴォワール赴任中の2002年9月、ある朝ふと気づけば、近所のそここで銃と爆弾による殺し合いが始まっていた。やがて、敵兵狩り出しを名目に政府軍が街じゅうのスラムに片っ端から火をかけてまわっているとの知らせが届き、自室の眼下数十メートルに見える一角にもやがて火の手が上がり金切り声が響くのかと、想像するだけで気が変になりそうだった。半日ばかりの戦闘でアビジャンだけで百数十人が殺された。眼下の家々は燃やされずに残ったけれど、他では何万人も焼け出された。戦闘が小康状態になった後、街の通りで、ふと言葉を交わした物売りやタクシーの運転手や歩哨に立つ軍人に、半ば無意識に「ほんとうにお察しします（Toutes mes compassions）」と口にしていた。かすかに頷く相手のかみしめるような沈黙。その沈黙を聞くことが慰めだった。

おばを探す旅の途上で少年兵となり、リベリアとシエラレオネの「部族戦争」のまっただ中で過ごしてきたピライマ少年が、「身におこったなりゆきのすべて」を語るといふこの小説を読み進むうちに、あの沈黙のことを思い出した。「ちんぴらみたいな口調」で饒舌に繰り出されるピライマの、「くそったれでいまましい人生」のさま、「アフリカを端から端まですっぽり包み込んでいるペテン」に対する罵倒と哄笑、旅すがらいっとき行動を共にした子ども兵が命を落とすたびに繰り返される「追悼の辞」。行を追ううち、あの頃どうしても整理しきれなかった自分の気持ちが、ああ、あれは「ペテン」だったのか、ああ、それは「いまましいこと」だったのかと感得されてきた。その作用には、あの頃あの沈黙に感じたのとおなじ慰藉のちからがあった。おそらく評者はこの小説をこれから何度も読み返すだろう。

著者アマドゥ・クルマ氏は、2003年12月11日に逝去された。享年76歳であった。すばらしい小説を残してくれたことに感謝します。そして日本語版をまとめ上げられた訳者にも感謝します。

（佐藤 章）

シンディウェ・マゴナ著 峯陽一／
コザ・アリーン訳 母から母へ 東
京 現代企画室 2002年 325p.



南アフリカ共和国、ケープタウン近郊のググレットゥ・タウンシップ。初めての全人種参加総選挙を数カ月後に控えた1993年8月、ここで一人の白人少女が殺された。彼女の名前はエイミー・ビール。アメリカからの留学生で、アパルトヘイトのもとで苦しんできた黒人の選挙準備を手伝う、善意あふれる人であった。10カ月の留学を終えて明日はアメリカに帰るという日、別れの瞬間をほんの少しでも先に延ばしたくて、エイミーは友人をググレットゥまで車で送ると申し出る。そして事件は起こった——「一人の入植者に、一発の弾丸を！」解放闘争のスローガンを叫びながら、タウンシップの若者たちが彼女の車を取り囲み、石を投げ始める。エイミーは、まさに彼らのような人びとを助けようとしていたにもかかわらず。

本書は、この実際に起きた悲劇を題材とした小説である。事件後、エイミーやその家族の側の情報が巷にあふれた現実とは対照的に、本書は、殺人者となった黒人少年の母親、マンディサの語りだけで構成されている。「私の息子が、あなたの娘さんを殺しました」で始まる一人語りのなかで、マンディサは「人を殺すのは正しいことではない」と前置きしたうえで、「だけど、あなたは、私の息子を理解しなければなりません」と、自分の生い立ち、そして息子が生まれ育ってきた状況を、被害者の母親に切々と語りかける。白人少女を死に追いやり、黒人少年を殺人者にした、宿命的邂逅に至る不幸な偶然の連鎖。その背後には、人種的抑圧に対する積年の怨嗟が暗く広がる。激しい集団的憎悪に否応なく呑み込まれ、少年は彼の人種の「代行者」として、少女にナイフを突き立てた。

南アフリカの歴史や社会に通暁し、物語の舞台となったケープタウンに暮らした経験もある訳者たちの翻訳、そして物語の背景を日本の読者が理解し、自分の経験に引きつけて考えるよすがとなる訳者あとがきが素晴らしい。

(牧野久美子)

川端正久著 アフリカ人の覚醒——
タンガニーカ民族主義の形成 京都
法律文化社 2002年 xvi+435+xiii
p.; 同著 アフリカ・ルネサンス
——21世紀の針路 京都 法律文化
社 2003年 203+xi p.



アフリカ政治研究に長年取り組んできた著者が、その成果を相次いで公刊した。2冊の本の性格は異なるが、いずれも長期的な研究蓄積の賜物である。

『アフリカ人の覚醒』は、植民地期タンガニーカにおける民族主義政党（TANU）の形成史である。1920年代末、間接統治政策下のタンガニーカで、アフリカ人社会福祉の向上を目的として結成された「アフリカ人協会」が、多くの農民同盟、商人組織、労働組合などの多様な動きを糾合し、「タンガニーカ・アフリカ人協会」そして「タンガニーカ・アフリカ人民族同盟」へと運動を変化させる約30年の過程が、豊富な一次資料を用いて丁寧に跡づけられている。

アフリカにおける新たな国家の担い手がどのような過程を経て形成されたのかという問題の重要性は、改めて指摘するまでもない。本書はこの点をタンガニーカについて詳細に描き出した労作だが、一国の事例を通じて他地域に関心を持つ者にも刺激的な問いを投げかける内容となっている。

一方、『アフリカ・ルネサンス』は、現代アフリカ政治に関する啓蒙書で、アフリカ連合、民主化、紛争、そしてアフリカ思想と、近年の重要なトピックが包括的に扱われている。個々のトピックに関する重要な論点はカバーされており、参考文献も充実している。地道な研究の蓄積があつてこそ、軽やかな啓蒙書が書ける。『アフリカ・ルネサンス』の幅広さは、『アフリカ人の覚醒』の深い掘り下げに支えられているのである。

一点だけ注文を付けるなら、書名にもなっている「アフリカ・ルネサンス」という新たな思想について、もう少し突っ込んだ著者の評価が欲しかった。著者はアフリカ思想に造詣が深く、本書でもかなりの紙幅を割いて論じているだけに、その系譜のなかにこの新たな思想がどう位置づけられるのか、著者の議論を聞いたかったと思う。

(武内進一)

坂井信三著 イスラームと商業の歴史人類学——西アフリカの交易と知識のネットワーク 京都 世界思想社 2003年 517p.



ニジェール川上流部を核として13世紀に勃興したマリ帝国は、東はニジェール川内陸デルタから、西は大西洋岸に至る内陸サバンナの政治統合を成し遂げたが、帝国崩壊後にこの版図には、生業・職能において分化した多様な人間集団が「差異と交換のシステム」を構成する、ひとつの社会的・文化的統合態が残された。これが本書で著者が検討の対象とする「マンデ世界」である。17世紀から19世紀末という激変期（第一に、ウォーラスティンの言う「近代世界システム」への組み込み、第二に、イスラーム思想に動機的一端を持つ一連の軍事的・政治的運動、すなわちジハードを経験した）に、このマンデ世界においてイスラーム商業民・学者が果たした歴史的役割を分析するのが著者の狙いである。

環大西洋地域での世界システムの拡大とスーダン地域へのイスラームの伝播という歴史の大きな動きと同時に、地域社会や個別の学者といったミクロな側面が緻密に描かれている点が素晴らしい。著者自らがフィールドで収集した口頭伝承の分析（第10章）は、数百年にわたってマンデ世界で展開されてきたイスラーム学者の学問的刷新（タジュディード）を追想する著者の筆を確かに支えている。人類学者の強みが如何なく発揮された、重厚かつ緻密な「マンデ世界のイスラーム史」である。

評者を含め「イスラーム」におもわず身構えてしまう読者（著者が指摘するように、希少な先達を例外とすれば、イスラームは西アフリカ地域研究の視野の外にあった）は、本書を導きとして、広くイスラーム世界全体との関連において、西アフリカのイスラームの歴史的特質を理解できるだろう。また、マンデ世界を参照点とすることで、西アフリカを長期的持続においてとらえるひとつの手がかりも得られる。新しい視野の発見に満ちた著作である。西アフリカ地域に関心を持つ者は、ディシプリンを越えて本書から多くを得るであろう。

（佐藤 章）

篠田雅人著 砂漠と気候（気象ブックス014） 東京 成山堂書店
2002年 192p.



本書は、砂漠の成り立ちについて、気候と植生に着目しつつ解き明かした本である。目次（第1章：砂漠を見たことがありますか、第2章：砂漠はどこにあるの、第3章：砂漠はどうしてできているの、など）が示すように、一般向けに平易に解説した本である。アフリカに限定したものではないが、かなり多くのページがサハラ砂漠について割かれている。

環境問題で「砂漠化」の問題が取り上げられることも多いが、では砂漠化とは何を意味しているのか、そもそも砂漠とはなんなのか、といった根本的な問いに本書は答えてくれる。本書では、砂漠を「降水量が少ないため、植物の根圏の土壌水が少なく、植生が少ない自然景観」（p.5）と定義しているが、この定義だけでも、砂漠を安易に「月の沙漠」のイメージでは捉えられないことを教えてくれる（ちなみに砂漠と沙漠の違いも説明されている）。

第6章までの砂漠についての基礎知識も十分面白いが、特に興味深いのが、第7章「砂漠化とは」、第8章「砂漠化が気候に影響するの」にある砂漠化についての解説である。砂漠防止条約では「……気候変動および人間の活動を含むさまざまな要因に起因する土地の劣化」（p.108）とあるが、この漠然とした定義を、より具体的にそして科学的に解説してくれる。砂漠化は、一つに収斂する現象ではなく、地域によって多種多様の形をとる。それらをわかりやすく分類し、どのような原因で砂漠化のプロセスが進んでいくのか、その対処法としては何が考えられるのか。そこから導かれる提言は、説得力があり明確である。

本書は、環境問題について、無策の政府や浪費する先進国について声高に非難するような本ではない。ひたすら、科学的にどうやって砂漠が形成されるのか、砂漠化が進むのかをひとつひとつみ砕くように解説してくれている。環境問題と砂漠化に興味がある読者には、もう一度何が問題なのかを見つめ直すために、必読の書といえよう。

（児玉由佳）

池谷和信編 地球環境問題の人類学
——自然資源へのヒューマンインパ
クト 京都 世界思想社 2003年
343p.



人類学の視点から地球環境問題を捉えることを目指した本書は、編者が1999年から国立民族学博物館で主催した共同研究会の成果である。「地球環境問題の原因は人間の生き方すなわち広い意味での人間の文化の問題である」という編者の基本認識は副題にもあらわれている。序章でも、「環境学」への参加が遅れた文化人類学のテーマは「自然資源の破壊と地域住民とのかわりあい」を焦点とするものとされ、その基本視角は従来から行われてきた文化、歴史、政治の「3つの生態学」および言説分析であることが明示されている。

編者は、環境問題を文化人類学的に研究する分野を「環境人類学」と呼び、本書の第Ⅰ部にはその方法論と問題点に関する三つの論文を配置している。市川論文（第1章）は西欧的自然観に立脚する環境問題論議に疑問を呈し、人為の介入を強調しつつ、「3つの生態学」によるアプローチを提起する。続く佐藤論文（第2章）は、流通する環境「神話」とこれに対するリヴィジョニストの批判を対比したのち、環境変化把握における地理的ツールの有効性、特にGIS（地理情報システム）の活用を紹介する。最後的小林論文（第3章）は環境破壊論に焦点を当て、不確定なデータに基づく議論が一般化している現状を指摘し、その背景となる分析視角や研究体制の問題を考察する。

続く第Ⅱ部から第Ⅴ部では、地理学、農学、経済学など隣接分野からの成果を加え、それぞれ森林破壊、「砂漠化」、希少生物、社会システムをめぐる論文が2本ずつ配置されている。これらのうち、主としてアフリカを事例として取り上げているのは、西アフリカ内陸地域の「砂漠化」について批判的に論じた嶋田論文（第6章）、「砂漠化」に対する国際的取り組みに関して砂漠化対処条約を軸に紹介した門村論文（第7章）、中部アフリカの大型類人猿の減少とその保護をめぐる動きを論じた山極論文（第9章）、「低エネルギー社会」についてタンザニアでの試みを題材に考察した杉村論文（第10章）である。

（望月克哉）

山本敏晴著 世界で一番いのちの短い国——シエラレオネの国境なき医師団 東京 白水社 2002年 225p.



国境なき医師団の「理念」に基づ

いた活動という欧米各国のほうが有名で、日本の活動はまだ小規模であるともいえるが、日本版のホームページやニュースレターで刻々と発信される情報は特に厳しい環境にある途上地域の現在を生々しく伝えてくれる数少ない確実な情報源である。その国境なき医師団に著者山本敏晴氏は参加して、2001年シエラレオネへと派遣される。著者は小学生のころ、アフリカを訪れている。そのとき見た子供たちの姿、ところかまわず蠅がとまっているのに平然としていた子供たちの姿が心に懸かっていた。その後もアジア・アフリカ40カ国以上を訪れ、「本当に意味のある自己満足ではない国際協力の道」について考え続けたという。本書刊行後のインタビューの中でも、「国際協力」について次のような六つのポイントを示している。(1)教育とその後のシステムの確立、(2)現地の文化や風習の尊重、(3)悲惨さを誇張しすぎない、(4)ファミリープランニング、(5)マイクロ・クレジットの実施、(6)無償で奉仕する人間がいるということを示すこと。本書にはこういう考えをもつに至った「実戦的」経験が満載されている。シエラレオネは世界一平均寿命の短い国なのだ。その平均寿命は34.0歳。なぜ？風景の写真を見るかぎり、日本でも見かけるような緑あふれる田園地帯である。原因は、「紛争」にある。となれば、医師として派遣された著者の体験は過酷なものであるはずだ。その内容の濃さにもよるのか、著者の意気込みなのか、文体はぐいぐいと読むものをひきつける。テレビなどに出演して語っておられた氏の存在感と同じである。生き生きとした写真も著者撮影である。「慣れるまでは羊でいることはやはり重要で、そうでないと嫌われ者になってしまう。が、最後まで羊でいると、自分の意志のないバカだと思われる」という言葉にも著者の国際協力に対するなみなみでない意欲が感じられる。本書は、シエラレオネの現実を伝える書でもあるが、国際協力はどうか、身近な問題として考えるのに絶好の書である。

（鈴木陽子）

Christiaan Grootaert and Thierry van Bastelaer eds. with a Foreword by Robert D. Putnam, *The Role of Social Capital in Development: An Empirical Assessment*, Cambridge: Cambridge University Press, 2002, xxii+360p.



本書は開発援助の分野で注目されている「社会関係資本」(social capital)の役割をミクロ(micro)、中間(meso)、マクロ(macro)のさまざまなレベルで実証研究した興味深い論文集である。本書では、社会関係資本は社会構造に関するものから人間の認識を制約するものまで、情報処理や集合行為に関わるものが対象にされ、経済学、社会学や政治学の研究者も参加している。本書でアフリカを対象にした論文は、マダガスカルの農業商人を扱った第4章のMarcel FafchampsとBart Mintenの論文、第7章でケニアに対する開発援助において社会関係資本が与える効果を分析したMary Kay GugertyとMichael Kremerの論文、社会的統合(social cohesion)と社会関係資本の関係についてルワンダとカンボジアの比較分析をしたNat J. CollettaとMichelle L. Cullenの論文、エスニシティと資本蓄積・紛争の関係を分析したRobert H. BatesとIrene Yackovlevの論文がある。またPaul Collier論文とStephen Knack論文は、アフリカ研究に関心をもつ人にも有益である。Collier論文は社会関係資本と貧困の複雑な関係を要領の良い方法で整理している。Knack論文はマクロ経済と社会関係資本の実証研究を展望し、小集団の協力と結束がマクロ経済に悪い影響を与えるというオルソン(M. Olson)的な見解と、その積極的な効果を強調するパットナム(R. D. Putnam)的な見解との比較を行っている(pp.43-45)。Christiaan GrootaertとThierry van Bastelaerによる結論の章では、さまざまな社会関係資本をマクロとミクロ、人間の認識に関するもの(信頼や規範など)と社会構造に基づくもの(地方の制度機構、組織やネットワーク)に整理して、この分野の研究動向をわかりやすく展望している。本書を読むことによって、地域研究に関心のある人も社会関係資本を軸にした学際的な開発研究の成果を学ぶことができる。(野上裕生)

武内進一編 国家・暴力・政治——
アジア・アフリカの紛争をめぐる
アジア経済研究所 2003年 xi+
510p.



発展途上国で頻発する武力紛争は、今日の国際社会が直面するきわめて重要な問題である。先進国間の戦争は第二次世界大戦が最後となったが、発展途上国では——特に内戦の形態をとって——武力紛争が頻発している。この問題への関心は近年日本でも急速に高まりつつあるが、主に先進国にとっての安全保障の観点からの議論が多い。しかし、根本的な対応を考えるためには、まず現実の紛争がいかなる原因で生じ、それがいかなる特質を持つかが理解されねばならない。本書が基準を合わせるのは、紛争研究におけるこの最も基礎的な部分である。

本書は、紛争研究の理論的な流れを整理した序章と、12の事例研究から構成される。事例研究として、アフリカから、シエラレオネ、ケニア、ルワンダ、南アフリカが、中東・中央アジアからイラクとカザフスタンが、南アジアからカシミール、北東インド、スリランカが、東南アジアから南部フィリピン、カンボジア、ラオスが分析対象に選ばれている。いずれも地域専門家の手による分析であり、地域研究に立脚した紛争研究となっている。

アフリカに関連する論考としては、編者の武内が序章に加えて、ルワンダにおける虐殺の実相について議論しているほか、津田みわが1990年代ケニアで起こった一つの政治暴力事件に関する詳細な分析を試み、落合雄彦がシエラレオネの紛争で噴出した暴力を検討し、遠藤貢がポスト・アパルトヘイト期の南アフリカにおける紛争の変質について考察している。

本書に所収された論文はそれぞれ完成度が高いが、相互に比較しながら読むとさらに面白い。例えば、ケニアと北東インド、ルワンダとスリランカ、南アフリカと南部フィリピンなど、異なる地域を分析した論文のなかに紛争の共通点を発見したり、相違点のなかに地域の特質が浮かび上がってきたりと、それぞれの論文が共振し、新たな知見を導いてくれる。

(編集委員会)